

## 原采蘋著「東遊日記」を巡って

— 中国地方の文人たちとの交流 (2) —

小谷 喜久江

日本大学大学院総合社会情報研究科

### Hara Saihin's *Tōyū Nikki*:

Fellowship among Poets in the Chūgoku Region (2)

KOTANI Kikue

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

Hara Saihin (1798-1859), a Kanshi poet from the Akizuki domain in Kyushu, left her hometown in 1828 for Edo to become a successful Kanshi poet. *Tōyū Nikki* is a diary of her travels through the Chūgoku region on her way to Edo.

I introduced part of the diary in the previous issue of this journal. Here I introduce the remainder. *Tōyū Nikki* ends in the city of Akashi in Hyogo prefecture, halfway to Edo. For the rest of the journey to Edo she left a directory indicating where she stayed, who she met, and so on, rather than a diary. Appended to *Tōyū Nikki* is an anthology of a hundred poems, which includes her love poetry. Saihin fell in love twice, though she never married. Her love poems went unpublished, unfortunately, because it was feared they would ruin her reputation as a respected Kanshi poet.

In this paper, I will focus on Saihin's love affair in Hiroshima as interpreted through her love poetry, thereby revealing her feminine side, which is not apparent from published anthologies of her work.

---

#### 1.はじめに

原采蘋は文政丁亥（十年）六月三日、江戸に向けて二度目の出郷を果たし、四月中旬兵庫に到達した。「東遊日記」はこの間の記録であり、原本は未確認であるが、大阪大学の「小天地閣叢書」所収の写本と、秋月郷土館所蔵の二種類の写本が存在する。郷土館の写本は、一つは大正五年に毛筆で筆写されたもので、誰の手になるものかは不明。その他は山田新一郎氏によるペン字の写本があり、これは「小天地閣叢書」を原本としたと明記してある。三種類の写本はそれぞれに異同が見られ、原本が確認できない現在では、どれを基準にするかは悩むところである。なお、本文中の□は写本通り不明な文字を表す。

前号の紀要では広島県の頼杏坪の紹介状までを載せるに留まったので、今号では十月十日、広島を離れてからの采蘋の動向を、日記と、日記の末尾に付さ

れた「□思唱和集」<sup>1</sup>の詩を照合して考察することによって、東遊の道程の詳細を明らかにしたいと考える。日記は四月十四日の兵庫県明石までで終わっており、それに続いて「□思唱和集」という詩集が付されている。東遊中に書かれた詩をまとめたもので、その中には広島で経験した恋愛の詩が含まれている。三十歳の采蘋が、漢詩人として成功する目的を持って遊歴を続ける中で経験した出来事、またそのときの采蘋の心情を知る上で貴重な資料であり、従来の先行研究ではほとんど触れられなかった采蘋の恋愛について考察することは、これまで定着してきた采蘋像に新たな一面を付け加えるには十分であると考えられる。江戸末期に女性が、単独で、漢詩人として遊歴を続けた現実を明らかにしていきたい。

---

<sup>1</sup> 最初の字は不明である。写本のママ。

## 2. 頼杏坪の紹介状

前号の紀要で紹介した杏坪の紹介状は、広島以降の采蘋の道程と重なっている。つまり采蘋は杏坪の紹介状を頼りにその後の道程を決定したものと思われる。十月十日以降の日記を検討するに当たり、参考のため再度紹介状を下記に示す。

|      |        |
|------|--------|
| 尾道   | 元吉     |
|      | 把翠園    |
| 今津   | 牡丹園    |
| 神辺   | 黄葉夕陽邸舎 |
| 備中笠岡 | 小寺君    |
| 鴨方   | 西山君    |
| 長尾   | 小野泉蔵君  |
| 倉敷   | 観龍寺上人  |
| 同    | 岡迂庵主人  |
| 岡山   | 萬波君    |
| 加古川  | 中谷諸子   |

### 2.1 広島以降の道程

十月十日 廣陵を發し、廣村<sup>2</sup>に到る。

十一月

八日 御堂<sup>3</sup>に到る。

十九日 尾道に達す。

廿九日 今津駅に到る。

十月十日、広島を出発した采蘋は呉にしばらく滞在し、その後御堂にも立ち寄り、十一月十九日によりやく尾道に達している。広島を去るに当たり采蘋は「錢十月九」「留別十日朝」「十日夜雨」「十一日過本安樓」の詩を残している。これらの詩は日記の後に付録された「口思唱和集」に見られる。「口思唱和集」については後述するが、上記の詩は広島で出会った男性との離別を悲しむ詩である。広島以降の日記はますます簡略化されているが、「唱和集」の詩と照合することで滞在先や旅の情景を知ることができる。尾道では「尾道の挹翠主人に和す」という詩題のみで詩は「欠」となっている。十一月二十九日に

今津に到着し、今津では「今津二日 雪」と「今津牡丹園」の二首が詠まれている。十二月二日まで牡丹園に滞在している。

#### 今津牡丹園

|         |                 |
|---------|-----------------|
| 春風吹綻牡丹芽 | 春風吹きて綻ぶ 牡丹の芽    |
| 元是沈香違愛花 | 元是れ沈香 違愛の花      |
| 妖艷從來傾國賞 | 妖艷は從來 傾国の賞      |
| 栽培自耐向人誇 | 栽培自ら向人に向ひて誇るに耐る |
| 倚粧飛燕無容色 | 粧に倚る 飛燕は容色無し    |
| 解語揚妃獨麗華 | 解語の揚妃 獨り麗華      |
| 似調清平出新曲 | 清平を調ぶるに似て新曲を出づ  |
| 併將太白屬君家 | 併せて太白を將つて君が家に属す |

十二月

三日～七日 神邊に滞留

八日 笠岡に到る

十一日 鴨方に到り、西山復軒を訪う。

十三日 中山の姫井貞（省）叔宅に遊ぶ。

十六日 西山に帰る。

十七日 口鴨方を發し、長尾に到る。尾野泉蔵に答宿。

十九日 節分

十九日 立春。長尾より宮内に到る。途中鷗鷯翁に邂逅す。遂に西河（阿）知を過ぎ、丸河（丸川松隠）氏に宿る。

廿日 立春。宮内に到り、真野竹堂翁苦見停、此に將に歳を迎えんとす。

十二月三日には神辺（福山市）に至り、菅茶山の「廉塾」に五日まで滞在した。茶山は采蘋が広島に滞在中、八月十三日に亡くなっていたが、茶山の遺影に参拝した後、廉塾では茶山の門弟が出迎えてくれ、一席を設けてくれた。席上采蘋はそれぞれの門弟と詩の応酬をしている。

廉塾にて邂逅中村口鷗鷯岳洲及添川と邂逅す、席上此を贈る

<sup>2</sup> 廣村は現在の広島県呉市。

<sup>3</sup> 御堂は広島市中区恵美須町。

萍蹤相遇豈尋常 萍蹤相遇ふは豈に尋常ならんや  
 賓主一堂皆異郷 賓主一堂 皆異郷たり  
 梅着寒花點白雪 梅は寒花を着けて 白雪を點ず  
 客藏遺墨在青囊 客は遺墨を藏して 青囊に在り  
 尋盟難奈山河邈 尋盟すること難し 奈んぞ山河の邈かなる  
 話舊還牽風樹傷 話は舊に還り 牽きて風樹傷む  
 此夕若非期群會 此の夕べ若非し群會を期するに非ざれば  
 愁中争得把杯觴 愁中争か杯觴を把ること得んや

鷓鴣翁より贈らるに和す

屋雪玲瓏映落暉 屋雪玲瓏 落暉に映える  
 遊方重叩碩人扉 遊方重ねて叩く 碩人の扉  
 欲知牝馬利貞處 知らんと欲す牝馬利貞の處  
 看取驚鴻避微飛 看取す 驚きたる鴻は微くを避けて飛ぶ  
 投宿通家多厚意 通家に投宿して 厚意多く  
 憐春芳樹有餘□ 春を憐み芳樹 餘□有り  
 悠々身跡東流水 悠々たり身の跡 水は東に流る  
 不識向西何日帰 識らず 西に向ひて何つの日か帰るを

酬添川氏

獨行唯有影隨身 獨行唯だ隨身の影有るのみ  
 到處相知多是新 到處相知る 是新しきの多きを  
 千里遊蹤憐我瘦 千里遊蹤し 我が瘦を憐む  
 連宵談話醉君醇 連宵談話す 君が醇なるに酔ふ  
 山寒鳥道獨封雪 山寒の鳥道 獨り雪に封づ  
 烟淡梅梢欲放春 烟淡の梅梢 放春を放たんと欲す  
 明歲函關同有約 明歲函關 同じく約有り

先鞭未識属何人

先鞭未だ識らず何人にか属すを

北條進之<sup>4</sup>に和す

若年詞筆感斯文 若年の詞筆 斯文に感ず  
 佳客良明多所聞 佳客の良明 聞く所多し  
 同調何邊無唱和 同調す何邊も 唱和無く  
 相逢親處又離群 相逢ひて親む處又離群す  
 參差別恨萬條柳 參差の別恨 萬條の柳  
 飄忽泛遊千里雲 飄忽として泛遊す 千里の雲

客舍明年臘梅節 客舍の明年 臘梅の節  
 西窓斜月定懷君 西窓の斜月 空しく君を懷ふ

○參差は失意のさま。(李白・詩・送梁四歸東平)  
 ○別恨は別れのつらさ。(李白・詩・憶旧遊奇譙郡元參軍) ○飄忽は素早いさま。

河村蓑洲に和す

未曾萍蹤落塵區 未曾 萍蹤落塵區  
 輪墨場中接丈夫 翰墨の場中 丈夫に接す  
 逢別忽々情不盡 逢別忽々として情は盡きず  
 待君祇説入江都 君を待ちて祇だ江都に入る

未だ曾て萍蹤塵區に落ちず  
 翰墨の場中 丈夫に接す  
 逢別忽々として情は盡きず  
 君を待ちて祇だ江都に入るを説く

采蘋の茶山訪問は文政八年、京都に行く途中で廉塾に立ち寄ったのが最初で、この時には茶山との詩の贈答があり、次の詩を贈られている。

原女史見贈韻<sup>5</sup>

椿堂曾是定交人、莫怪逢君即相親、更看髯蘇送行句、詞華羨見一家春。

(椿堂曾て是れ交を定めし人、怪む莫れ君と逢ふて即ち相い親しむを、更に看る髯蘇が行を送るの句、詞華羨みて見る一家の春。)

また、茶山はこの詩の注に次のように書いている。

<sup>4</sup> 俗称は道之進、号は笠峰、名は退。

<sup>5</sup> 菅茶山『黄葉夕陽村舎詩(全)』復刻、児島書店、1981年12月、840頁。

女史父古處翁曾屢過余女史酒間出示家兄送別詩  
東坡有妹頗富才藻。

(女史の父古處翁、曾て屢しば余を過ぐ。女史、酒  
間に家兄の送別の詩を出し示す。東坡妹有り。頗る  
才藻に富む。)

采蘋の父原古処も文化年間に江戸への参勤交代の  
途中、数回廉塾を訪問していたのである。頼山陽は  
後に茶山のこの詩を読み、次のような頭注を付して  
いる。

此女史来京一相逢於朱雀旗亭肥笨頗有乃翁骨口  
誦此詩琅琅

(此の女史、京に來りて一たび朱雀の旗亭に相い逢  
ふ。肥笨、頗る乃翁の骨有り。此の詩を口誦して琅  
琅たり。)

前回の旅では、采蘋は京都での桜の開花に間に合  
うようにと早々に旅程を切り上げ、三月の初め京都  
に入った。この時に山陽に面会したことが上記の頭  
注によって知られ、また采蘋は酒席で茶山から贈ら  
れた詩を朗々と読み上げたことも知られるのである。

今回の訪問は奇しくも茶山の墓参となり、「悼茶山  
先生」という詩を残している。

|         |                       |
|---------|-----------------------|
| 曾陪吟坐得相親 | 曾て吟坐に陪して相親む<br>ことを得たり |
| 正是閑園花柳春 | 正に是れ 閑園花柳の春           |
| 識生難為死□□ | 生を識り為し難く死□□           |
| 空理玉樹委黃塵 | 空しく玉樹を理めて黄塵に<br>委す    |
| 梅開窓外俱含笑 | 梅は窓外に開き 猶ほ笑み<br>を含む   |
| 人坐帷前更愴神 | 人は帷前に坐して 更に神<br>を愴ましむ |
| 記得當年送我日 | 記るし得たり 當年我を送<br>る日    |
| 倚門双髻白於銀 | 門に倚りて双髻銀より白し          |

采蘋は文政八年に神辺に立ち寄り、京都に旅立つ

時に見送ってくれた茶山の姿を思い出し、詩に賦し  
ている。八日には笠岡に到り、小野李山翁八十の賀  
会に出席したことが次の詩から知られる。

賀備中笠岡小野李山翁八十

|         |                         |
|---------|-------------------------|
| 黃薇海上有仙神 | 黃薇海上 仙神有り               |
| 髮載秋霜心居春 | 髮は秋霜を載し 心は春に<br>居る      |
| 骨緑髓青長得々 | 骨緑髓青 長じて得々たり            |
| 階蘭庭玉又振々 | 階蘭庭玉 又振々たり              |
| 性同函谷遺徑老 | 性は函谷に同じく 徑に遺<br>りて老ゆ    |
| 年似渭陽垂釣人 | 年は渭陽に似て 垂釣の人            |
| 瞿鑠如翁何以是 | 瞿鑠として翁の如し 何を<br>以てか是ならん |
| 知他孝養更娛親 | 他の孝養を知りて 更に娛<br>み親しむ    |

十一日は暢方に到り、西山復軒を訪う。西山復軒  
は拙齋の子で、頼杏坪の紹介状に見える西山君も復  
軒のことであろう。菅茶山と親しく交際した人は拙  
齋である。十三日には中山の姫井省叔宅に遊び、次  
の詩を賦している。姫井省叔(桃源)も茶山の交友  
録に登場する人物である。

姫井省叔書齋壁上に題す

|       |              |
|-------|--------------|
| 聚頭一室中 | 聚頭 一室の中      |
| 強半断根蓬 | 半ばは強ひて 根を断つ蓬 |
| 坐自無賓主 | 自づから坐して 賓主無く |
| 心寧有異同 | 心は寧んぞ 異同有らん  |

十七日には長尾の招月亭主人小野泉蔵宅に投宿、  
十九日は立春。長尾より宮内に到る途中、廉塾の中  
村鷗鷯翁に邂逅している。その後、西河知の丸川松  
隠を訪ねて詩を残している。丸川松隠は名を茂延と  
言い、松隠は号である。かつて大阪の懷徳堂で書を  
講じ、また備中関藩の参与となった人で、この時は  
郷里に隠退していた。「次韻松隠翁二首」は采蘋の単  
独の東遊を非難する松隠の詩に対し反論したもので  
ある。

松隠翁に次韻す二首

|         |                        |
|---------|------------------------|
| 任重三千道杳然 | 任は重く 三千の道は杳然<br>たり     |
| 人言遠覓伯鸞賢 | 人言は遠く覓む 伯鸞の賢           |
| 月中折桂知何日 | 月中桂を折るは 何れの日<br>か知らん   |
| 自笑無階欲上天 | 自笑す 階無くして天上を<br>欲すを    |
| 此行此意使誰知 | 此の行 此の意 誰にか知<br>らしめん   |
| 不是浪遊好怪寄 | 浪遊を是とせず 好みて寄<br>するを怪しむ |
| 常恐招来所生辱 | 常に招来を恐れて 辱を生<br>ずる所    |
| 遊方幸然老来規 | 遊方 幸然たり 老来の規           |

十二月廿日、宮内に到り、真野竹堂の苦見亭に宿り、ここで文政十一年の新年を迎えたのである。元旦に賦した詩には「今朝阿母児を思ふ処、知るや否や遅留し此郷に滞るを」と故郷の母を思う句が見える。三日には吉備神社に参拝し、「羽毛養い得て 漸く披々たり」とゆつくりと新年を祝い、旅の疲れを癒すことができたとある。また六日には藤井高尚の書斎松屋に遊び、七言律詩を詠んでいる。

元旦口号

|         |                      |
|---------|----------------------|
| 寅賓紅日物皆揚 | 寅みて 紅日を賓く物皆揚<br>がる   |
| 椒酒相迎戸々慶 | 椒酒で相迎ふ 戸々の慶          |
| 聚首幾時慰親膝 | 聚首するに幾時ぞ 親しく<br>膝を慰む |
| 同根三子各他郷 | 同根の三子 各おの他郷に<br>あり   |
| 帰鴻漸渚青蘋轉 | 鴻は漸く渚に帰りて 青蘋<br>は轉ず  |
| 啼鳥出幽嫩柳長 | 啼鳥は幽を出て嫩柳は長し         |
| 過暖関心花信早 | 過ちて関心を暖むるも 花<br>信は早し |
| 春遊恐後洛山芳 | 春遊後るを恐るるも 洛山<br>は芳し  |

又

|         |                     |
|---------|---------------------|
| 吉備山雲欲暁光 | 吉備山の雲暁光せんと欲す        |
| 四五聲高野梅香 | 四五の聲高く 野梅の香し        |
| 今朝阿母思兒処 | 今朝 阿母 児を思ふ処         |
| 知否遅留滞此郷 | 知るや否や 遅留し此郷に<br>滞るを |

竹堂翁に同飲し、席上此を賦す

|         |                    |
|---------|--------------------|
| 僑居為主々為賓 | 僑居主と為り主は賓と為る       |
| 同是昇平二百民 | 同じくは是れ昇平二百の民       |
| 罷女去家遊自在 | 女家に去くを罷めて自在に<br>遊ぶ |
| 相迎一笑賀新年 | 相迎へ一笑して新年を賀す       |

三日吉備祠前

|         |                      |
|---------|----------------------|
| 幾群賓客踏春行 | 幾群の賓客春を踏んで行く         |
| 感應曾聞鑊有聲 | 感に應じて 曾て聞かざる<br>聲有り  |
| 吾亦相隨羅拜去 | 吾亦相隨ひ 羅拜して去る         |
| 虔祈工作迅雷鳴 | 虔んで工作进行を祈れば 迅雷<br>鳴る |

松屋氏雞頭樹園に遊ぶ 六日

|         |                   |
|---------|-------------------|
| 一囊行李淡生涯 | 一囊の行李 生涯淡し        |
| 琴酒相隨任所之 | 琴酒相隨ひて 之く所に<br>任す |
| 今日醒須明日解 | 今日の醒須らく明日解す<br>べし |
| 新年會自舊年期 | 新年の會 舊年より期す       |
| 菲才慙我陪吟坐 | 菲才を慙じて 我吟坐に<br>陪す |
| 新句債誰裁好詩 | 新句誰に債りて 好詩を<br>裁す |
| 春暖澗溪毛漸長 | 春暖澗溪 毛漸く長し        |
| 殷懃摘取侑金觴 | 殷懃摘取 金觴を侑む        |

真野翁に寄す二首

|         |                   |
|---------|-------------------|
| 倦鳥投君借一枝 | 倦鳥君に投じて 一枝を<br>借る |
| 羽毛養得漸披々 | 羽毛養ひ得て 漸く披々<br>たり |

好晴日々春風暖  
鳴謝低回欲去遅  
好晴の日々 春風暖かく  
鳴謝 低回して 遅れて  
去んことを欲す

過了一年成底事  
勝興屢停得意地  
一年過ぎ了りて底事成る  
興勝りて 屢し停る 意  
を得るの地  
燈前屈指計前程  
燈前に指を屈して 前程  
を計る  
道路三分猶贏二  
道路三分して 猶ほ二を  
贏す

留別十六日（備中宮内の真野翁に寄せる）

客久他郷似出郷 客他郷に久しく 郷を出る  
に似たり  
高楼置酒把離觴 高楼に酒を置き離觴を把る  
千絲萬綏歡園柳 千絲萬綏 園柳を歡ぶ  
別恨與之孰短長 別恨之と孰れか短長ならん

戊子孟春 （文政十一年正月）

十六日 宮内駅を發し、岡山に到る。  
十九日 岡城より深本宿の酒店に到る。  
廿日 和氣に到り、長谷川文右衛門宅に宿る。  
翌廿一日 北方に到り、明石退藏宅に宿る。  
廿五日 緒方に到り、小田謙蔵（盤石）に投ず。  
廿七日 赤城に到り、橋本甚右衛門。  
廿八日 中島採珠楼にて紅梅を見る。夜に入り三木  
元一に宿る。  
廿九日 雨中□□に到り、復た緒方に帰る。  
二月十六日より十八日に到る。大霾。  
十九廿日□□□  
三月廿五日 程を發し、瀧城に到る。是日雨にて圓  
尾文叔に宿る。春盡きて姫府宿学校に到り、深澤興  
平主人に会す。

備中宮内の真野竹堂翁の苦見停で正月を迎え、十  
六日まで滞在した。留別の詩には「客久他郷似出郷」  
とあり、真野竹堂の苦見停での滞在が居心地の良い  
ものであったことを物語っている。  
一月十六日、宮内駅を發し、岡山に到る。岡山では  
中島旅宿に宿り、旅宿の侘しさが「偶成」という詩

に詠まれている。また十八日には儒者の萬波醒盧に  
会ったことが詩に残されている。また十九日には「岡  
城より深本宿の酒店に到る」と日記にあるように、  
深本宿の酒店に立ち寄り、その後に旅宿したのであ  
ろう、旅先の侘しさを五律に詠んでいる。

旅宿 十六夜 偶成

丁頭明滅一燈残 丁頭 明滅す 一燈の残  
風雪帰来夜正蘭 風雪帰り来って 夜正に  
蘭く  
蠅屈自憐多病客 蠅屈自ら憐む 多病の客  
木綿衾薄不耐寒 木綿の衾薄く寒に耐えず

吾行何處不同盟 吾何處にか行かん 盟を  
同じくせず  
樂地優遊千里程 樂地に優遊す 千里の程  
此行獨少風流主 此の行獨り少く風流の主  
夜雨弧燈有旅情 夜雨の弧燈 旅情有り

萬波先生に寄す 十八日

金峯殘雪白於銀 金峯の殘雪 銀より白し  
一路衝泥訪碩人 一路泥を衝きて碩人を訪ぬ  
半日春風相對處 半日 春風相對する處  
話談早已醉君醇 話談早く已に君が醇なるに  
醉ふ  
尊前無語不虛無 尊前語無く 虛無にあらず  
一世文章仰碩儒 一世の文章 碩儒を仰ぐ  
（以下欠）續貂客 （以下欠）續貂客  
閑吟低首費工夫 閑吟低首して工夫を費す

○閑吟は詩歌を静かに口ずさむこと。

十九日

不知深木道 知らず 深木の道  
一任竹輿行 一任し竹輿に行く  
捲鳥集高樹 捲鳥 高樹に集まりて  
征人貧旅程 征人 旅程貧し  
（以下欠）  
投宿坐亭清 投宿 亭に坐して清し  
塵客皆眠着 塵客 皆眠に着く  
飽聞洗耳聲 聞くに飽く 耳を洗ふ聲

二十日には和氣に到り、長谷川文右衛門宅で次の詩を賦している。翌日明石退蔵宅を訪問。明石退蔵（希範）は古処の知人の武元景文の一族で、医者であり、屋号を披雲閣と称した。そこで二十一日と二十三日に賦した詩がある。

廿日

|         |                |
|---------|----------------|
| 一路春風入和氣 | 一路の春風 和氣に入る    |
| 大江口群棹聲聞 | 大江口群 棹の聲を聞く    |
| 遠人倦脚貧程罷 | 遠人の倦脚貧しき程に罷る   |
| 来宿臨清閣上雲 | 宿に來りて臨めば閣上の雲清し |

廿一日 清閣に臨み即事

|         |               |
|---------|---------------|
| 山秀水奔両絶寄 | 山秀水奔り 両絶に寄る   |
| 山春融雪入溪聲 | 山春雪を融かして溪聲に入る |
| 碧流不口舟多少 | 碧流不口 舟多少      |
| 五々三々鼓棹行 | 五々三々 棹を鼓して行く  |

廿三日 披雲閣擇菓帖に題す

|       |               |
|-------|---------------|
| 借問師何去 | 借問す 師何くにか去く   |
| 方書状上間 | 方に書状上る間に      |
| 偶来留浪跡 | 偶たま来って 浪跡を留む  |
| 信宿亦強顔 | 信宿 亦た強顔       |
| 連日生雲處 | 連日 雲を生ずる處     |
| 認君採菓山 | 君に認む 採菓の山     |
| 久辭秋月府 | 久しく辭す 秋月の府    |
| 幸欲竊丹還 | 幸い丹を竊みて還らんと欲す |

一月二十五日、播州赤穂（兵庫県）に到り、小田謙蔵（盤石）に投じた。盤石は古処の旧知の友人で、名は攸好、字は徳郷、盤石は号である。采蘋は盤石の家を拠点として赤穂近郊の知人友人を訪ね、或は書を講じて二カ月の長逗留となった。ここより「金蘭簿」を付け始めている。

三月朔 同盤谷主人残樽を携え山花を賞す  
落花如霰月如烟 落花は霰の如く 月は烟の如し

四野寥々午夜風  
獨有愁人眠不着

垂楊枝上聽新鶉  
雲想山花々想雲

雲裝花綴更難分  
東方二十四番外  
暘谷春風産異芬

四野 寥々たり 午夜の風  
獨り愁人有りて 眠りに着かず

楊枝を垂る上に新鶉を聴く  
雲は山花を想ひ 花は雲を想ふ

雲装花綴 更に分ち難し  
東方 二十四番の外  
暘谷の春風 異芬を産む

二十七日には赤城に到り、橋本甚右衛門（名は典・子則、号、市隱）を訪ね、二十八日には中島瑞軒（号、慎齋）の採珠楼にて紅梅を愛で、次の詩を賦している。その夜には御医師の三木元一（号、嗒齋）に投宿している。

採珠楼にて紅梅を賞して分韻す

|         |                |
|---------|----------------|
| 東皇近似愛容華 | 東皇は容華を愛しむに近似す  |
| 先使梅妃試妝靚 | 先づ梅妃をして妝靚を試さしむ |
| 舞袖賜緋寵正新 | 舞袖緋を賜り寵正に新たなり  |
| 醉顔暈酒霞相映 | 醉顔暈酒 霞みて相映ゆ    |
| 春寒不厭卷珠簾 | 春寒 厭はず 珠簾を卷く   |
| 吟客多情秉短檠 | 吟客は多情 短檠を秉る    |
| 午夜楼頭一陣風 | 午夜の楼頭 一陣の風     |
| 暗香時繞衣襟淨 | 暗香時に繞りて 衣襟淨し   |

三月廿五日、いよいよ盤谷に別れを告げる日が来た。二か月の長逗留の後の別れの辛さは次の詩によって察することができる。

盤谷山人に別す

|         |                    |
|---------|--------------------|
| 一家敬愛話情親 | 一家敬愛し 話情親たり        |
| 閑却羈旅度幾旬 | 羈旅を閑却して幾旬に度る       |
| 欲具行装光候霄 | 行装を具せんと欲して 光霄に候す   |
| 因悲生別轉傷春 | 生別を悲しむに因りて 轉じて春を傷む |
| 落花芳草長亭暁 | 落花の芳草 長亭の暁         |

積水遙天獨住身 積水遙天 獨り住む身  
萍梗合離雖有約 萍梗の合離 雖約有るのみ  
空臨岐路嘆清塵 空しく岐路に臨みて 清塵を嘆く

夏（四月）

朔日 同所  
二日 鹿浦に遊び、帰路本荘に宿る。  
四五 内山整葦に宿る。  
六日 加古川に到り、高橋氏に投ず。  
七日 中谷真作招飲す。  
八日 尾上に遊ぶ。  
九日 本郷招飲し、晩、鹿子川に舟を泛ぶ。  
十日 夜伯洗滌後、中谷三助宅に投宿す。  
十三日 明石に到り、前田氏を訪ふ。故あり旅宿す。  
十四日 兵庫にて小田（伊織）氏を訪ふ。遂に藤田（万年）氏に到り、同人の世話にて旅宿す。  
十五日  
十六日

四月六日には加古川に到り、高橋氏に投じている。翌日は中谷真作に招かれ七律を賦す。九日には「本郷招飲し、晩、鹿子川に舟を泛ぶ。」と日記にあるように本郷氏攬翠軒という人に招待されて、晩には川に舟を浮かべて興じている様子を詠んだ詩や菅雞助を訪問した時の詩を残している。

中谷氏招飲し、席上主人に次韻す。  
經歲飄遊西復東 歳を経て飄遊す 西復た東  
至今家書祭難通 今に至りて 家書を祭るも  
通じ難し  
歸寧夢断雲山路 歸寧して 夢断たん 雲山  
の路  
反哺鴉噪日夕風 反哺 鴉は噪ぐ 日夕の風  
且看尋盟逢韵士 且く看よ尋盟して 韵士に  
逢ふを  
何知話舊及家翁 何んぞ知る 話は家翁の舊  
に及ぶを  
回思十六年前事 思ひを回すは十六年前の事  
遊者如此彈指中 遊者 此の如く 彈指の中

菅雞助翁を訪ふ  
出城十里路横斜 出城して十里 路は横斜す  
遅日吟行不厭賒 遅日の吟行 賒るを厭はず  
誰識遊蹤千里外 誰か識る遊蹤 千里の外  
偶然相訪是通家 偶然相訪ぬれば 是れ通家

攬翠軒招飲し晩に鹿子川に泛舟す  
四月勲風雨後天 四月 勲風 雨後の天  
山皆新緑水清漣 山皆新緑にして 水は清漣  
たり  
鷗汀時買扁舟去 鷗汀時を買ひて 扁舟去る  
欲載殘樽破暮烟 残樽を載せんと欲すれば  
暮烟を破る

疊韻して高橋蒼山に和す  
此去悠々又向東 此を去りて 悠々として又  
東に向かふ  
神交千里夢相通 神交 千里 夢に相通ず  
家元天末帰何日 家元より天末 帰るは何れ  
の日ぞ  
跡似楊花飛倚風 跡は楊花に似て 飛びて風  
に倚る  
同調最親唯有子 同調最も親しきは唯だ子有  
るのみ  
再期願及未成翁 再期 願ひ及びて 未だ翁  
と成らず  
高楼別後如相思 高楼の別後 相思の如し  
一々書來尺素中 一々書き來たる 尺素の中

采蘋の金蘭簿によれば、高橋蒼山は恕介といい加古川の人。上記の詩は高橋蒼山の詩に和して疊韻したものであるが、後半の句は明らかに心を通わした情感が表現されている。この詩は采蘋詩稿の中でも代表作とされており、故郷の秋月に詩碑が建てられている。高橋蒼山が金蘭簿にある通り加古川の人であれば、秋月城祉に建てる詩碑の内容としては相応しくないように思われる。この理由からか、この詩は甘木詩社の門人に宛てたものとする説もあるが、確かな資料がない今、今後の研究を待つほかはない。日記は四月十四日「兵庫にて小田（伊織）氏を訪ふ。遂に藤田（万年）氏に到り、同人の世話にて旅宿す。」

までの記載で終わっているが、「□思唱和集」には九日に鹿子川に舟を泛べて詠んだ詩までが書かれており、それ以降の詩は見られない。

### 3.2 「金蘭簿」について

金蘭簿は、東遊中に会った人々の人名録として、「東遊日記」とは別に、文政十一年正月、岡山県宮内を発する時から記録されたものであり、江戸に到着するまでに交流した人物が記録されている。現在秋月郷土館に自筆本が残されている。紙面の関係上その表を載せることはしないが、日記や詩に登場する人物について詳細を知ることができる。

### 3. 「□思唱和集」

「東遊日記」の記述は四月十四日の兵庫県明石までで終わっているが、そのあとに「□思唱和集」という詩集が続いている。東遊中に詠んだ詩をまとめて「唱和集」としたものであり、九月九日の重陽の日からの詩を集めたものである。采蘋は後に京都に立ち寄った時に頼山陽・梁川星巖に添削を請うているが、それらの詩はこの「唱和集」から抜粋したものである。京都で両氏に添削を請うためにまとめた詩集であるとも考えられる。頼・梁川両氏に見せた詩集の原本は確認できていないが、秋月郷土館蔵の写本「原采蘋詩稿」（佐谷氏蔵）には両氏の評が付されているため、これがその写本である可能性がある。

「□思唱和集」には約八カ月間に詠まれた百首程の詩が収められている。特に重陽後の詩は日記には書かれず、「唱和集」にまとめられているため、日記と「唱和集」の詩を参照することで采蘋の旅の詳細を知ることができる。さらに「□思唱和集」のもう一つの特徴は、広島で経験した相思の詩が含まれていることである。漢詩人としての采蘋の評価を気にする余り、後世の伝記や研究書にはこの部分は触れられていないため、紙面の許す限り紹介したいと思う。

#### 3.1 「□思唱和集」中の相思の詩

「□思唱和集」の前半には、無名氏と贈答した相思の詩が三十数首収録されている。これらの詩によって広島で過ごした二ヶ月間の状況を窺い知ることが出来る。また十月十日、広島を離れた後も、無名氏

に対する恋情は一カ月に亘って連綿と詩に綴られている。この件に関しては春山氏の伝記<sup>6</sup>にも言及されており、春山氏の知り得た情報によれば広島での二カ月間にただ一度水明楼での面会の機会を持ったのみで、あとは文通によってお互いの情意の交流を図ったとある<sup>7</sup>。また無名氏については、文政十二年（1829）、十八歳の時に父に従ってこの地方を遊歴した際、その才学を耳にした名家の子息であり、その時以来憧れを抱いていた人であった可能性があるという。「十年聞才質 千里侍輿時」と唱和集の詩にも見えることでそれも納得できることである。

「□思唱和集」は、無名氏から贈られた詩十二首から始まり、それに和した采蘋の詩が続いている。無名氏の采蘋に対する恋情と三十歳の采蘋の抑えきれない思いがそのまま表現されている。

重陽後一夕欲訪佳人心期不果悵然作数首録支韵

無名氏

（重陽後一夕佳人を訪ねんと欲す。心期果さず、悵然として数首を録して支韵と作す。）（六首中五首）

鴻鳴月白酒醒時  
今夜何邊移婉姿  
無限西風吹錦袖  
不看一字送幽思

鴻鳴き月白く 酒醒る時  
今夜何邊にか 婉姿を移す  
無限の西風 錦袖に吹き  
一字として幽思を送るを看ず

近枕寒蜚聲更悲  
終宵不寢寫相思  
烏啼窓月驚西望  
正是佳人睡覺時

近枕の寒蜚 聲は更に悲し  
終宵寢ねず 相思を寫す  
烏啼き窓月 西望に驚く  
正に是れ佳人睡覺の時

夜話心期又背期  
合離有約莫勞思  
容光在目不禁得  
愧寫疑心寄婉辭

夜話心期あり 又背期あり  
合離約有り 勞思莫し  
容光目に在りて禁じ得ず  
疑心を愧じて寫し 婉辭を寄す

<sup>6</sup> 春山育次郎『日本唯一の閨秀詩人原采蘋』原采蘋先生顕彰会編、1958年10月

<sup>7</sup> 春山前掲書、148頁

昨夜秋莊同笑嬉  
把杯共醉菊花籬  
寒窗下欲能成睡  
夢遂香風到水湄

昨夜の秋莊 同に笑嬉す  
杯を把り共に酔ふ菊花の籬  
寒窗下げんと欲して 能く  
睡りを成す  
夢は香風を遂げて水湄に到  
る

賦筆每逢看妙奇  
何啻天質称萸脂  
野花江月情愈切  
向我願無説別離

筆を賦し逢ふ毎に妙奇を看  
る  
何んぞ啻に天質の萸脂を称  
ふのみならんや  
野花の江月情愈いよ切なり  
我に向ひて別離を説くこと  
無きを願ふ

(六首中五首) 無名氏  
獨坐閒宵望月時  
誰知消瘦減容姿  
送迎日々人多少  
不是心頭儂所思

獨り閒宵に坐して月時を望  
む  
誰か知るらん消瘦して容姿  
を減ずるを  
送迎の日々 人多少  
心頭 儂思ふ所是にあらず

新知雖樂也堪悲  
必竟萍蹤足別思  
早識幽情難拂去  
相逢何及不逢時

新知樂むと雖も也堪だ悲し  
必竟 萍蹤 別思に足る  
早識の幽情 拂ひ去り難し  
相逢ふは何んぞ逢ざる時に  
及ばん

淨几明窗君負期  
不知何日話相思

淨几 明窓 君期を負く  
知らず何れの日か 相思を  
話さんことを

尺書有脚儘来往  
空調幽人寫婉辭

尺書脚有り 儘く来往す  
空しく調ふ幽人婉辭を寫す

強向傍人一嬉媚  
消閒摘菊歩園籬

強いて向ふ傍人 一嬉の媚  
消閒に菊を摘みて 園籬を  
歩く

風流才子多輕薄  
不似吾儂萬種思

風流才子 輕薄多し  
似はず吾儂 萬種の思ひ

○消閒は暇つぶしのこと。

連宵待月有心期 連宵月を待ちて 心期有り  
秋夜長吟漏水遲 秋夜長吟すれども漏水遅し  
不怪佳人数孤負 怪しまず佳人孤負を数ふを  
閨中應擁玉豐肌 閨中の應擁 玉豐の肌

無名氏の切々と恋情を訴える詩に対して、十八日  
夕の詩には「東方微かに白く、驚…」とあることか  
ら、おそらく采蘋は朝方まで相手を想ってうとうと  
と一夜を明かしたものと思われる。

十八夕、東方微かに白く、驚□□□□枕頭を  
拈む、一絶句を得て是を録す

玉容清潤是潘郎 玉容清く潤ふ 是れ潘郎  
此夕同吟月下牀 此夕同吟す 月下の牀  
醉夢□来無所在 醉夢□来 所在無く  
獨欣竟體帶遺香 獨り竟體遺香を帶ぶを欣ぶ

○玉容は美人のたとえ。

廿日 無名氏  
夜月凄其木葉鳴 夜月其凄くして木葉鳴る  
恐寒衣袖見深情 寒を恐る衣袖深情を見る  
生憎林鵲驚霜起 生憎林鵲 霜起に驚き  
未至天明離別聲 未だ天明に至らず 離別  
の聲

二十日には無名氏からまた七絶を受け取ったよう  
で、これに和して七律四詩をもって答えている。

和  
更喜天縁期不違 更に喜ぶ天縁期違はざるを  
異香豈料帶裳衣 異香豈料らん裳衣を帶ぶを  
深情不盡秋宵短 深情は盡きず 秋宵は短し  
空使心魂遂月飛 空しく心魂をしひて 月飛  
ぶを遂げしむ

朦朧醉裡別江亭 朦朧たる酔裡 江亭に別る  
帰臥宵長酒亦醒 帰臥す宵長 酒亦た醒む

起見霜楓林頭月 起きて見る霜楓 林頭の月  
何分半夜照各庭 何ぞ半夜を分ちて 各庭を  
照らさん

蔡氏能文未有郎 蔡氏能文にして 未だ郎有  
らず

何人得倚合歡牀 何人か寄り得て 歡牀に合  
はん

芳情幸有不捐去 芳情幸ひ有りて 捐去らず  
一関新詩惹妙香 一関の新詩 妙香を惹く

思人夜臥夢難成 思人夜臥すれども 夢成り  
難し

欹枕乍聞剥啄聲 枕を欹てながら聞く 剥啄  
の聲

壯語報君々莫恠 壯語君に報ゆ 君恠む莫れ  
松門缺月満胸情 松門の缺月 満胸の情

和或再疊韻（五首のうちの三首）

墜葉紛々林月鳴 墜葉紛々として 林月鳴る  
閑庭聯歩有餘情 閑庭聯歩して 餘情有り  
豈図被底鴛鴦夢 豈図らん 被底 鴛鴦の夢  
驚破金雞第一聲 驚破す金雞 第一聲

世間兒女豈無郎 世間の兒女 豈に郎なから  
んや

儂獨未知暖半牀 儂獨り未だ知らず 半牀を  
暖む

不意飛花委露處 不意の飛花 露處に委す  
風流有客更憐香 風流客有り 憐香に更る

君擁豊肌夢已成 君豊肌を擁き 夢已に成る  
寧聞月下叩門聲 寧ろ聞かん月下 門を叩く  
聲を

小童伶俐知君意 小童伶俐にして 君が意を  
知る

壯語無情報有情 壯語の無情 有情に報ゆ

采蘋と無名氏との交際はもっぱら文通をもって行  
われたもので、ただ一度の水明楼での会合があった  
が、この恋愛が春山氏の指摘するように人目を忍ん

で交わされたものであることは詩の随所から窺われ  
る。

答□子

君意吾方信 君が意 吾れ方に信ず  
吾心君那戯 吾が心 君なんぞ戯れんや  
到門又歸去 門に到りて 又歸去す  
恐被月明知 月明に知られるを恐る

柔情通處恐人窺 柔情通ず處人の窺ふを恐る  
我子天神只四知 我が子天神只四知あるのみ  
或向他門君韻友 或は他門に向ふ 君は韻友  
休將淫具作嫌疑 淫具を將て嫌疑と作すをや  
めよ

○四知は我・子・天・神の四者が知っている。

和

窓隙空見夜月窺 窓隙空しく夜月窺ふを見る  
思人情意有誰知 思人の情意誰か知る有らん  
林光向曉無消息 林光曉に向ひて 消息無く  
蓬戸秋風屢相疑 蓬戸の秋風 屢し相疑ふ

俠氣不除去 俠氣 除去せず  
交深却受疑 交り深く 却て疑ひを受く  
廿年為人謀 廿年 為に人に謀らる  
忠乎心自知 忠か心か 自ら知る

繡被生紅浪 繡被 紅浪を生み  
鴛央交頭時 鴛央 交頭の時  
水楼残夜夢 水楼 残夜の夢  
只有月明知 只だ月明のみ知る有り

和

餅菊落寒影 餅菊 寒影を落して  
小楼上燭時 小楼 燭を上る時  
待人々未到 人を待つも 人未だ到らず  
情思有誰知 情思 誰か知る有らん

氤氲花氣暖 氤氲 花氣暖かなり  
鴛央夢成時 鴛央 夢成する時  
此處多春意 此處 春意多し

洲會恐得知 洲會 知り得るを恐る

酒冷燈將滅 酒冷く 燈將に滅んとす  
水明殘衣時 水明 殘衣の時  
喜悲似為字 喜悲 字と為すに似たり  
此恨與誰知 此の恨 誰とともに知る

再疊

粧就窓猶白 粧就りて 窓猶ほ白し  
更待結夢時 更に待つ 夢結ぶ時  
剥啄心期有 剥啄 心期有り  
傍人都不知 傍人の都て知らず

○剥啄は足音、戸をたたく音。

三疊

十年聞才質 十年 才質を聞く  
千里侍輿時 千里 時に輿るを待つ  
深契亦天助 深く契る 亦た天助を  
鬼神有預知 鬼神 預め知る有り  
樓燭宵將半 樓燭 宵 將に半ばならんとす  
重来結夢時 重ねて来つて 夢結ぶ時  
澄紅深日夜 澄紅 日夜深く  
曉月獨相知 曉月 獨り相知る

十月十日、采蘋の広島出発に先立ち、九日には無名氏から餞の詩が贈られ、それに対して十日朝には留別の詩を贈っている。日記には「十月十日 廣陵を發し、廣村<sup>8</sup>に到る。」とあるように予定通り十日には広島を去ったのであるが、その後も無名氏への想いは断ち切れず、約一カ月の間、思慕を募らせている詩が続いている。

餞十月九

蘭山芳野鴨水湄 蘭山芳野 鴨は水湄にあり  
棹月吟花空相思 月に棹さし花を吟じて 空しく相思ふ  
苒土三千東下日 苒土三千 東下の日  
孤燈或有把杯時 孤燈或ひと有り杯を把る時

留別十日朝

客久他郷似出郷 客として他郷に久しく 郷を出るに似たり  
高楼同酌別離觴 高楼にて同に酌す別離の觴  
請看日夜東流水 請ふて看る日夜東のかた流るる水を  
別意與之孰短長 別意は之れと孰れか短長ならん

十日夜雨

暗風吹雨四檐鳴 暗風吹く 雨は四檐に鳴る  
文枕幽斎無限情 枕枕幽 無限の情  
昨夜江樓同一醉 昨夜江樓にて同に一醉す  
豈知各地聽斯聲 豈知るや 各地斯の聲を聴くを

十一日過本安樓

風景依稀水竹郷 風景は依稀たり 水竹の郷  
斯亭斯閣共杯觴 斯の亭 斯の閣 杯觴を共にす  
一朝夢覺人相遠 一朝夢覺めて 人は相遠し  
無盡江流惹恨長 江流は盡くること無く恨みを惹きて長し

#### 4. おわりに

二回にわたって原采蘋の「東遊日記」を紹介してきたが、「口思唱和集」の全詩を紹介することは紙面の関係上不可能であった。これらの詩集は今後翻刻集としてまとめたいと考えている。「唱和集」が示すように無名氏と采蘋の恋は相思の関係であった。しかし春山氏が指摘するように<sup>9</sup>相手は妻帯者であり、采蘋自身も父の遺言という重い責務があった。文字通り叶わぬ恋であった。広島の後、神辺、加古川などを経て京都に至り、頼山陽、梁川星巖と面会し、道中書きためた詩の添削を依頼している。星巖はこの時、三島までの紹介状を書き与えている。采蘋はこれらの人々を訪ねながら、文政十一年の冬、目的地の江戸によりやく辿り着いたのである。

<sup>8</sup> 廣村は現在の広島県呉市。

<sup>9</sup> 春山前掲書、148 頁。

(Received:December 20,2013)

(Issued in internet Edition:February 7,2014)